いぶき

2019年7月発行

今月の言葉

わがはからわざるを
自然ともうすなり
これすなわち他力にて
ます　（親鸞聖人）

発行所
真宗大谷派　光善寺
発行人　太田高顕
茨木市島2丁目3－16
電話　072(632)7107
http://www.eonet.ne.jp/~kouzenzi

お盆を迎える

お盆を迎える時節になりました。連日多忙な生活をされている方も、お寺に身を運びお話を聞いてください。お内仏の前で手を合わし、亡きご家族、ご先祖のことを偲ばれるのもよいでしょう。ご自身にこめられた深い愛情や願いが感じられるのではないでしょうか。ご縁がありますよう願っております。

盂蘭盆会のご案内

光善寺
八月十三日（火）
午後七時半より

安楽寺（野々宮）
八月十二日（月）
午後七時半より

俳句の世界と仏教

四季の移り変わる自然の中で生活する私たちですが、いつの間にか自然とともに生きていることを忘れていたのかもしれません。人間も自然の一部だと教えてくれるものが俳句です。俳句を作ることで自然と親しくなり、深く自然を知るようになるのではないでしょうか。

ホトトギスを主宰する高浜虚子は、「人間も自然の一部である」と述べています。しかし、近年の自然観はこれとは逆で、人間の都合で自然を支配しようとし、行きつく先は今日の自然破壊でした。

存問こそ念仏者のくらし

高浜虚子は「日常の存問が即ち俳句である。」と語ります。存問とは、簡単に言えば挨拶のこと。日常出会う人々や、自然の万象に対する挨拶、それがそのまま俳句になるのです。いま、ここに自分が出会った自然や人びと、できごとをしっかり受け止めること。そしてそのときの感動や驚き、疑問の気持ちを絶えず自分自身に語りかけるのです。

虚子は、「南無阿弥陀仏は愚夫愚婦に対する日常の救いの声である。」（『虚子俳話』）と語る念仏者でもあったのです。念仏に親しんだ虚子にとって、語り合う相手とは阿弥陀さまの深い慈悲のお心であったに違いありません。阿弥陀さまに手を合わせ、念仏もうす生活が本当の挨拶（存問）であります。そこにおのずから自然と共感・共生する喜びが生まれるのではないかと思うのです。

編集後記

▽木曽の原生林を見学する機会があった。岐阜・長野両県に広がる原生林は、その大半がヒノキとサワラである。澄みきった水が渓流となって絶えず森を潤している。何千年もの間美しいヒノキ林が保たれてきたことに驚く。樹齢数百年のヒノキが岩を抱き込むように根を張っている姿に涙が出る。▽大自然に包み込まれている心地よさをおぼえ、エネルギーが湧いてくる気がするのであった。原生林に生きるヒノキも、私たち人間も大自然のなかで共なるいのちを生きてきたのだと実感したことである。